

渋沢栄一翁の名言・語録 1

監修・資料提供
渋沢史料館

仁義道德と生産殖利とは、
元来共に進むべきもので
あります。

（出典：1923年・大正12年演説／東京MX「中小企業の底デカラ」）



「道德経済合一説」が収録されたレコード版
（帝国発明協会における演説）



講演する渋沢栄一 中外商業新報社（大正13年6月1日）

渋沢栄一が説く「道德経済合一説」の冒頭の一節。道德的な観念を持った正当な生産殖利によって産業活動を活発化させる必要性が述べられている。また、同説では公益を第一とする考えも述べられている。「道德経済合一説」は、江戸時代に定着した商業蔑視観を取り払うのに大きな役割を果たし、商人の意識向上に貢献し、商業界育成の精神的支柱となった。また、暴走しがちな市場経済に基づく資本主義の精神的制御装置の役割を果たした。

渋沢栄一翁の名言・語録 ②

監修・資料提供
渋沢史料館

経済に国境なし。

いずれの方面においても、

わが智恵と勉強とをもつて

進むことを主義と

しなければならぬ。

(出典…渋沢栄一訓言集／国家と社会)



エジソン電気会社に於ける渡米実業団 (明治42年9月25日)



渋沢栄一 七十歳

政治面での外交は、「国」を一つの単位として行われるが、民間の特に経済活動を通して見た場合は、「国」という単位にとらわれることなく、事業主・事業体間で自由な関係を築くことが出来る。まさに、経済には国境はないということである。渋沢の支援を政府に頼りすぎることなく、民間の創意工夫、「民」の力によって、強い絆が結ばれることへの期待が込められている。

渋沢栄一翁の名言・語録 3

監修・資料提供
渋沢史料館

意欲は怠慢の基である。

（出典…渋沢栄一訓言集／一言集）



居室の栄一

欲がないことを良しとする考えは、必ずしも正しくない、欲は、むしろ行動の源となるという考え。文明の進歩・発展は、人間の欲がもたらしたものとする。ただ、渋沢は、過剰な欲は、無益な競争社会を助長し、戦争に至り、文明を滅ぼす基ともなると警鐘を鳴らし、欲を保持しつつ、それをコントロールすることの重要性を説いている。

信用は暖簾や外観の
設備だけで、収め得られる
ものではなく、
確乎たる信念から
生ずるものである。

（出典：渋沢栄一訓言集／座右銘と家訓）



記者らの囲み取材に応じる渋沢栄一 総理大臣官邸（昭和4年8月9日）

人が信用出来るか否かの基準は、その人が保有する資産や肩書きといったものではなく、その人の生き方・考え方が揺らぐことなく、一本貫かれているか、つまり確固たる信念を保持しているかといったところにあるという考え。渋沢が大きな信用を得ていたのは、彼の行動が、長期的なビジョンを基に確固たる信念が貫かれていたからこそである。

渋沢栄一翁の名言・語録 5

監修・資料提供
渋沢史料館

新しき時代には
新しき人物を養成して
新しき事物を
処理せねばならない。

（出典…渋沢栄一訓言集／学問と教育）



東京高等商業学校 (七十寿祝賀会記念帖より)

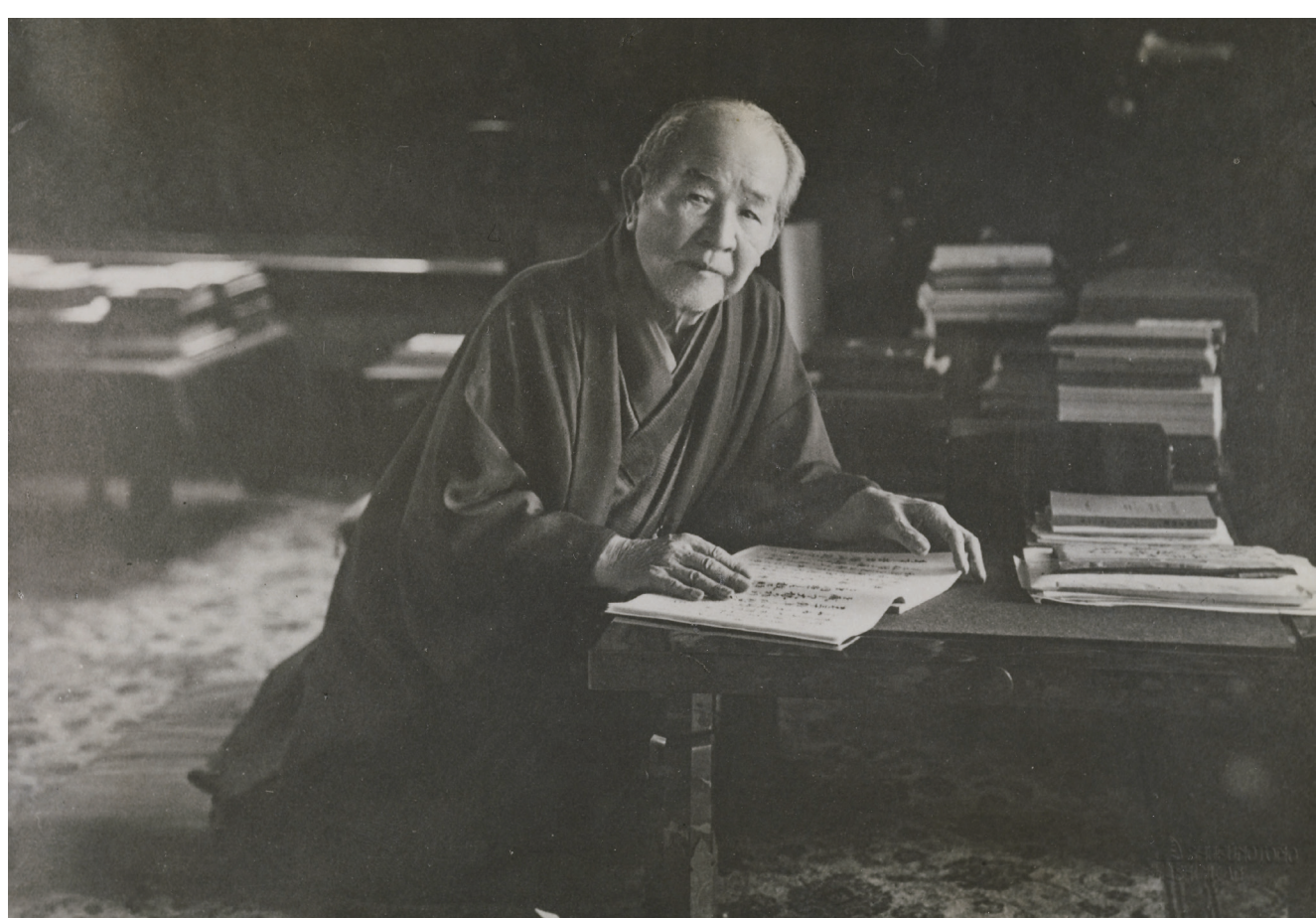


渋沢栄一 (明治16年)

社会は絶えず変化し続けているが、刻々と状況の変わる中で、いくら成功事例とは言え、過去の先例に固執していたのでは諸事象への対応がうまく出来ない。新しい時代を迎えた時に、新しい方法で対応出来る新しい人を養成する必要があるとする考え。「新しい人」づくりに尽力した渋沢の根底にはこの考えが流れていた。

信には義が
伴わねばならず、
義には信が
伴わねばならない。

（出典：渋沢栄一訓言集／一言集）



渋沢栄一肖像（撮影年次未詳）

渋沢は、人が正しく生きる上で、必要不可欠なのが信と義であり、それら是一对となるものであるとする。それでも人は、時として嘘をついたり、利己的な考えを抱いたり、信義を見失うことがあることを戒め、「信念」を通す上で「仁義」を大切にすることを伝えている。

あらた

日々に新にして
また日に新なりは面白い、
すべて形式に流れると
精神が乏しくなる、
なんでも日に新の
心懸が肝要である。

(出典：論語と算盤／理想と迷信)



新聞を読む栄一 飛鳥山邸 (大正15年5月26日)

自分に課せられた仕事を、毎日機械的に処理するだけで満足している人がいる。形式ばかりこだわり、真実に目を向けないでいると、形骸化した世の中となり、心豊かに生きることができない。特に官僚の世界に見られがちだが、民間の企業等でも、同じような雰囲気がある。ただ、そういった社会に反発して、自分だけ突っ走る人もいる。その双方を戒めつつ、渋沢らしい進取の精神を訴える。

国家の富が増すほど貧民が多く
なることは、実験上の事実である。
この困難の人をして
よくそのところを得せしめるのが
すなわち王道であつて、
同時に世の富豪家の
鑑むべきことである。

（出典：渋沢栄一訓言集／慈善と救済）



板橋本院新築披露 病室にて（大正13年3月21日）

産業振興がはかられ、国富が増すことで、世の中が繁栄したかのように見えるが、貧富の差が拡大し、困窮者の増加を目の当たりにする。このような状況をしっかり直視し、特に富を得た人たちが手を差し伸べるのが、世の正しい道とする考え。産業振興に尽力した渋沢が直面した現実であり、社会福祉事業、労働環境整備の尽力に導かれた思いであった。